
絶対に起き上がらない死体

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対に起き上がらない死体

【Nコード】

N7712H

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

この世には二種類の死体がある。二度と起き上がらない死体と、起き上がる死体だ。その違いが分かるだろうか？

絶対に起き上がらない死体を抱えた王子様は、草の中から現れる。
少女はたった今、投げ捨てたばかりの人形を拾い上げて云う。

「その人形は生きているの？」

「いや、生きてはいない」

「だったら何で、そんなに大事にしているの？」

「これは人形なんかじゃないよ」

「だったら何？」

「これは、いや彼女は絶対に起き上がらない死体だよ」

「変なの、だって死体は起き上がらないもの」

「それは違う」

「起き上がる種類の死体のことを僕は知っている」

男は黒いスーツとネクタイをしている

「メアリー、ロッソ、アイマン、ネルダ」

男はぶつぶつと名前を呟いている

「そんなの嘘よ、だって……だって、ママは生き返らないもの」

「そうか、その人形も、心無くしてしまったんだね」

「人形に心？」

「その人形は君の為に随分泣いてくれたろう？」

「そうかしら。人形は喋らないし、涙も流さないわ」

「本当に？」

男がネクタイを緩めると、人形から水が零れる。

「あれ？ なにかしら、これ」

「君は心無くした人形だけど、いつか、起き上がらないといけ
ない」

その時初めて、少女は強く思った。

「わたしは人形じゃない」

「さあ、もう行かなきゃ」

「待って、わたしはどうすればいいの」

「残念だけど、君を起き上がらせるのは君自身の力だから」

少女は人形の涙を拭いた。

「僕は彼女を連れていくけど、君はどうする？」

「わたしは……わたしも連れてって」

黒い服の男は首を横に振り、少女はそこに取り残された。

周囲には遺棄された人形たちが積み上げられており、彼女はその中でようやく目を覚ました。

「わたしは……わたしの名前はサクラ、起き上がる種類の死体。わたしを棄てた人間の名前を今でもまだハッキリと覚えているわ」

少女はボロボロになった人形を抱きながら言った。

すると人形の山の中から青年の声がした。

「その人形は生きているのか？」

「ううん、これは人形じゃないわよ。これはね……絶対に起き上がらない死体よ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7712h/>

絶対に起き上がらない死体

2010年12月13日18時29分発行